

トヨタとSUBARU、EV専用プラットフォームおよび SUVモデルのEVを共同開発することに合意

- ◆ 両社が培った技術を持ち寄り、EV専用プラットフォーム(中・大型乗用車向け)を共同で開発
- ◆ トヨタの電動化技術と、SUBARUのAWD(全輪駆動)技術を活用
- ◆ EV専用プラットフォームをベースに、CセグメントクラスのSUVを共同開発し、両社のブランドで販売

トヨタ自動車株式会社(以下、トヨタ)と株式会社SUBARU(以下、SUBARU)は、中・大型乗用車向けのEV専用プラットフォーム、およびCセグメントクラスのSUVモデルのEVを共同で開発することに合意したことを公表しました*1。加えて両社は、共同で開発した車両を、各々のブランドにて販売する予定です。また、これらのプラットフォーム/車両の共同開発においては、トヨタが仲間づくりに取り組んでいる電動化技術とSUBARUが長年培ってきたAWD(全輪駆動)技術を活用するなど、両社の持つ技術の強みを持ち寄ることで、EVならではの魅力ある商品づくりにチャレンジしてまいります。

トヨタとSUBARUは、2005年に業務提携について合意して以来、2012年には共同開発したFRスポーツカー「TOYOTA 86」/「SUBARU BRZ」を販売し、2018年にはトヨタの持つハイブリッド車技術に関する知見を活用して、SUBARUオリジナルのプラグイン・ハイブリッド車「CROSSTREK HYBRID(クロストレック ハイブリッド)」を米国で販売するなど、開発・生産・販売など様々な分野での協業を深めてまいりました。

自動車業界は100年に一度といわれる大変革期の渦中にあり、両社はコネクティッド、自動化、シェアリング、電動化といった「CASE」と呼ばれる新しい領域への対応をはじめ、これまで以上に広い領域において、スピード感を持った技術開発が求められています。今回の合意は、これまでの両社が深化させてきた協業の中でも、特に対応が急がれるCASE領域の中の「E:電動化」への新たな協業に合意したものです。

EVの商品化においては大容量電池の搭載が必要であり、普及に際しては異次元の電池供給量が求められることに加え、航続距離や充電インフラ敷設状況によるクルマの使われ方の違いから、これまでのアプローチとは違った販売手法が求められるなど、現時点ではコスト・供給・売り方など様々な課題が山積しています。

両社は、これら市場の多様化するニーズや様々な課題にスピード感を持って対応するためには、これまでの発想にとらわれない新しいビジネスモデル、業界の垣根を超えて様々な仲間とともに取り組むことが必要だと考えています。今回はその第一歩として、両社がお互いの得意とする技術を持ち寄り、可能な部分は協調することで、その製品化を加速させながら、EV専用プラットフォームを共同開発してまいります。同プラットフォームは、CセグメントからDセグメントクラスのセダン、SUV等の複数車種への幅広い応用や、効率的な派生車開発にも対応できるよう開発してまいります。

*1: SUBARUでは、従来独自開発を中心に進めてきたEV開発を、今回のトヨタとの合意に伴い、共同開発へシフトさせます。これにより、技術・開発・調達などの面で更なる効率化を図るとともに、お客様にとって魅力あるEVの実現を目指します。



共同開発するEV専用プラットフォーム(イメージ)